センサーで夜間巡視廃止

スタッフの不安解消も

社会福祉法人信愛報恩会

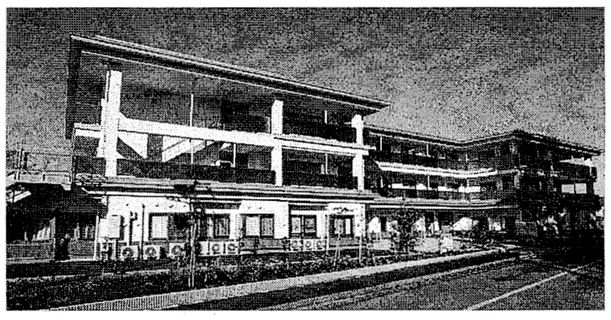
社会福祉法人信愛報恩会（東京都清瀬市）は昨年10月、ICTを活用するためのプロジェクトチームを発足。特別養護老人ホーム2施設、グループホーム1施設で記録システムと見守りシステムを導入した。情報管理室の北川美歩室長に話を聞いた。

情報管理室
北川美歩室長

――プロジェクトチーム発足の経緯は。

北川　介護業界では、人材不足の対策、介護と医療の情報連携、働き方改革などが求められているため、介護業務におけるイノベーションを行う必要がある。例えば、今までは夜間巡視やおむつ交換、体位変換の業務を時間単位で行っていた。見守りセンサーを導入すると、センサーを確認して、中途覚醒したタイミングでケアを行うといった予測分析による介護が可能になる。スタッフの負担軽減だけでなく、利用者の睡眠の質向上にもつながる。

◀ICT活用の様子



◀しんあい清戸の里外観

――導入機器選定のポイントは。

北川　介護記録を共有して介護と医療を連携させることが、地域包括ケアシステムの要になるため、請求システムを中心に業務全体をシステムで連携させる必要があるため、ワイズマンの医療・介護連携サービス「MeLL＋」を導入。見守りシステムは、感度が良すぎても誤報などが発生するため正確なセンシング能力に加えて、連携能力のあるエコナビスタの見守りシステム「ライフリズムナビ＋Dr.」を導入した。

予測分析による介護

――導入後の動きは。

北川　施設単位で管理するのではなく、情報を法人全体で一括管理して、教育や活用方法などを統一している。ICTを導入した3施設で月に1回程度会議を行い、それぞれの活用方法などを共有しながら、成功事例を現場に浸透させている。特養では今までユニットごとのケアだったが、センサーのアラートが共有されるため、スタッフ間で協力する機会が増えた。

――導入後の成果について。

北川　ライフリズムナビ＋Dr.の導入により、夜間巡視を廃止することで、スタッフの業務負担が軽減した。今まで休憩時間も利用者のことを気にしていたが、容態に変化があった際にセンサーが反応するため不安が解消されて、休憩と仕事のメリハリをつけることができるようになった。睡眠の質・時間を把握できるため、起床時間や日中の活動をデータに基づいて促すことができるようになりケアの質が向上した。また、計画的に業務を進められるようになり、スタッフのやりがいも創出することができた。

――ICT活用を成功させるためには。

北川　システムの選定も大きく影響するが、スタッフに介護現場の変化の必要性を理解させて価値観の変化に適応する準備をさせること。システムに業務を合わせるため、新しい行動基準や考え方などの導入プランの構築と、システムを皆で育てるためにスタッフが学習しながら、浸透・習慣化させることが必要だと考えている。